

# コレクション展 - 新所蔵品を中心に -

2017年1月13日(金)–3月26日(日) 10時–17時 金・土・日・祝開館 (月~木は冬期休館)

[入館料] 一般: 300円 シニア (70才以上)・障がい者: 200円

学生 (小学生~高校生): 150円 CAFE・SHOPコーナーは入館無料

有元 利夫  
安斎 重夫  
五百住 乙人  
伊藤 千穂  
井口 峰幸  
伊藤 彰規  
上野 憲男  
かわたことみ  
川本 紀子  
木村 忠太  
國司 華子  
栗原 一郎  
郡司 宏  
齊藤 智史  
坂本 善三  
佐々木 和  
佐々木 誠  
佐野 ぬい  
志村 ふくみ  
鈴木 裕三  
田嶋 健  
田端 麻子  
富永 敦也

栗原一郎  
「横顔とバラ」油彩



中村 真美子  
野田 哲也  
平澤 重信  
舟越 桂  
藤井 勘介  
藤代 裕  
前田 昌良  
真鍋 由伽子  
宮崎 文子  
宮崎 和佳子  
山口 長男  
横溝 多恵子  
吉岡 順一  
渡辺 早苗  
わたなべゆう

浮世絵  
北渓 (江戸期)  
国貞 (明治期)

古伊万里  
古唐津  
江戸期土人形  
ガラス

昨春、日本橋高島屋で開催された「栗原一郎展」を見に行った時の事である。その日の日記から——崩壊寸前の裸婦、溶解寸前の街景、雨の樹、哀しみを放つ絵の数々。中でも雨の中の建物を描いた風景は、荒ぶる情念の中に溶けゆくようで、これが絶筆になってしまふのかと思えるほど、鬼気迫るものだった。あれほど体調が優れなかつたのに、いつこんなに凄い絵を描いたのだろう……。それから一ヶ月ほどを経て、福生の栗原宅を訪ねた。アトリエに入ると、椅子に掛けて煙草に火を点けられ、私に珈琲を運んで来てくれた奥様に、俺にもくれや、と言われた。最初にお会いした頃に比べれば、随分と小柄になられた感があるが、あの鋭い画家の眼は何一つ変わっていない。「いつ描いたかって?また胃の手術をしてね、その後に描いたんだ。そりやあ体温は悪いさ。でもこの10年、良かった事なんて一度も無いんだから今に始まった事じゃない。俺にとっては、描く事が生きる事だから……。それに、どうせやるんなら下手な個展はやりたくないだろ。ああ、あの樹の絵かい?あれは確かに、年末に描いたんだ。あの時は、あんな心境だったのかな——」画家は淡々と話されていた。その後、どんな話の成り行きだったか「凄い執念ですね」というような事を申し上げたら、栗原さんはにわかに厳しい表情になって、こう言われた。その言葉が忘れられない。「もう、これで最後だと思って描いてるんだ。俗な言い方をすれば『命を削って』描いてるんだよ。『執念』なんて、そんな甘ちよろいもんじゃないんだ」、私はその言葉を聞いて、栗原さんの事を分ったようなつもりになっていたけれど、分ってなどいなかったなと思った。栗原さんにとって、「執念」などという使い古されて手垢の付いたような言葉は、甘い感傷に過ぎなかつたのだろう。「執念」でさえ「甘い」と言える生き方をしている人が、この世には居る。現に今、生きて闘っている。私は自分の言葉の使い方を恥じた。

HP: 心の花美術館▶検索 メール: info@kokohana-artmuseum.com  
〒386-0012 長野県上田市中央2-7-23 tel/fax: 0268-22-0022

心の花美術館  
art collection museum

